

# 柴田優呼著 『“ヒロシマ・ナガサキ” 被爆神話を解体する』——隠蔽されてきた日米共犯関係の原点

伊藤 詔子



二〇一五年は、被爆七〇年目の真実といった形で多くの被爆体験を語る記憶の書、写真集、歌集、また随筆として森瀧市郎『核と人類は共存できない』（七つ森書館）などが出版された。中でも奥付に八月六日／九日を記す『決定版広島原爆写真集』『決定版長崎原爆写真集』（いずれも勉強出版）や、『被爆樹巡礼』（実業之日本社）など七〇年前の視覚的証言と自然回復の無言の証言も目を惹いた。批評界でも、戦後レジームの解体を目指す研究が本書のほかにも数冊上梓された。成田龍一の総括によると「記憶の時代に入った原爆経験を歴史化するための営みが始まった」（『原爆文学研究』一四、二八三年であり、七一年目に入ってもその動きは継続している。ここから二〇一六年五月二七日、伊勢志摩サミットで来日するバラク・オバマの現職の大統領としては初めての広島訪問が決まった。議論の多い主語なき慰霊碑の文言にも拘わらず、時代は慰霊碑を中心に（原爆）の歴史化に向かって大き

く動いてきたようにも見える。

さて本書『ヒロシマ・ナガサキ「被爆神話を解体する」』の著者はニュージブランド最古のオタゴ大学で助教授を務めるが、朝日新聞で九年間仕事をした後アカデミズムに転じ、被爆神話の持つ文化論的意義について流麗な英語で議論する数少ない日本人の論客である。二〇〇〇年に香港大学比較文学部でMA取得後、英米批評でも高名な教授陣の並ぶコーネル大学アジア研究学部で二〇〇九年博士号を取得した。その後も国際学会や日本での「記者クラブ」招聘講師として活躍する。こうしたキャリアから伺えるのは、本書の特質ともなっている一國主義を打破する国際的な視野と場での議論の力であり、緻密な推論と歯切れのよい立論、しばしば精査と分析だけに終るアカデミズムの通弊を超えた、ジャーナリズムの美点である批評的で実際のな結論の提示である。四章構成で各章が三から五節の論理的な構造を持ち、前半で被爆神話の解体、後半で日米の共犯関係の解明が語られる。学位論文“Transnational Image of Hiroshima and Nagasaki: knowledge Production and the Politics of Representation” (2009)でも展開された被爆表象の政治性がいかに国を超えて構築されるかが力強く論じられている。

本書は、本来英語の記号である引用符でヒロシマ・ナガサキを囲むタイトルにも鮮明に表れているように、これまでの主要な被爆のストーリーを、「アメリカが創始し独占した」神話と捉えてその解体をまずは提案する。その被爆神話を形成してきたプロセスの原点を二つの文書に見定めて、占領下検閲の実態や日米の資料を、フーコーやソントグらの批評理論も駆使して鋭意分析し、

そこに日米の文化的政治的共犯関係を易出する新鮮な切り口をみせ、(原爆投下)と被爆のストーリーは、日米が実は隠蔽しながら相互に支えてきた言説の闘いの歴史でもあったとする。

著者が議論の原点に置いたのは、原爆投下後一六時間後にホワイトハウスから発布されたトルーマン大統領の(原爆投下)声明と、一九四六年八月三一日「ニューヨーカー」に一挙掲載され単行本ででたジョン・ハーシー作 *HIROSHIMA* (New York: Knopf, 1946, rep. 1973. 日本語訳『ヒロシマ』法政大学出版局、一九四九、増補版二〇〇三)の二つの言説である。巻末に原文も掲載されているトルーマン大統領の原爆投下声明は、政治的・歴史的に比類なき重要性を帯びる文書として、一九九五年の機密文書解禁を機に、マンハッタン計画そのものや、声明発布のプロセスについてかなり歴史研究が進んでいる。しかし声明文の言語とレトリックについては、主としてトルーマンのゴーストライターを務め、『零の暁』の著書でよく知られる『ニューヨークタイムズ』の科学記者ウィリアム・L・ローレンス研究の側から論じられてきたが、さらに詳細な検討の余地もあった。本書は声明にある「究極の勝利」等いくつかの語に内包される「原爆の語りの創始」(三九)性という、新たな見解を付け加えたといえるだろう。

トルーマン声明の意義づけを著者は「原爆使用は確かに、第二次大戦における様々な局面での戦いに終止符を打つ大きなきっかけとなった。しかし原爆に関して言うならば、その言説を巡る新たな戦いも、この時始まったのである。原爆使用後のアメリカが勝たなければいけなかったのは、原爆の意味づけを巡る戦いだった」(二八一―一九)とする。さらに著者の認識は「この戦いにおい

て日本が実質的にアメリカの側に立つ形で参加してきたのではないかと、「アメリカが創始した原爆の語り」と、日本でなされている被爆の語りの中には、あまりにも共通点が多い」（二〇）として、戦後日本が科学立国をめざしアメリカに飲み込まれていった背景には、トルーマン声明のレトリックの内面化が日本の政治や言説に起こったからだとする。また著者は原爆製造及び国家として倫理的破綻を齎す核兵器の使用は、「科学者の頭脳と、産業力、労働力の三位一体の総力戦によってもたらされたものだ」（二七）とするが、トルーマン宣言はその最も困難な部分、軍事施設でなく教育施設や住宅・商店街を標的とした空前絶後の暴力を肯定する言説の構築そのものであったとしている。

しかし戦後世界で軍事・経済のみならず米国の文化的ヘゲモニー樹立の重要な契機となったこの声明の分析には、建国以前の旧世界に根ざすレトリックや、ローレンスやオッペンハイマーをはじめとするユダヤ系知識人の影響の歴史も考察されてよいであろう。ユダヤキリスト教的思考の枠組みや、ピューリタン時代より培われアメリカ化した大統領の戦時スピーチの長い伝統なども視野に入ってくると思われる。著者はいみじくも声明初めの三段落「太陽から引き出されたこの力が、極東の戦争を齎した者どもに対して放たれ「遠い辺境に巣くう他者を成敗した」（二四）を分析する。この三段階のレトリックこそ、中世に発しピューリタン時代の説教で育まれ、最近のイラク戦争まで引き起こさせた、戦争を巡るアメリカ大統領の「正義の戦争」という政治宗教的言説枠である。味方の正義の認定（神の側に立つことの認定）、敵の悪魔性の特定、戦いの聖戦の認定のエレミア書に発する三段論法

の実践であり、文学史家サクバン・バーコヴィッチが、（アメリカン・ジェレマイアッド）（*The American Jeremiaid*, U of Wisconsin P, 1978）と呼び、J・エドワースからヘミングウェイまでアメリカ文学の基本的パラダイムでもあるとしたものでもある。現在このパラダイムは多文化主義の中で批判にさらされているが、アジアを他者として表象するポストコロニアルな西欧中心の宗教政治的地勢図とレトリックは当時頑強であった。

著者も鋭意指摘するように、それはトルーマンが使った「原爆を投下した」（*dropped*）という言葉に端的にあらわれた。英語ではその後爆撃（*Bombing*）がよく使われるが、投下には、「その行為に対する客観的、中立的装いをこらす」人間を捨象する働きがあり、「加害者と被害者の双方のアイデンティティを曖昧化」（二三）する結果を生んだ。また本書は声明の爆発力のみの方点は放射能被害を覆い隠し、核の非人道性を覆い隠すとともに、原爆実験とその後の核実験で汚染された国内の環境被害の問題も、日米で情報の絶対統制に走らせる要因となり、核の悲劇をグローバルに拡大させた点を強調する。

GHQのプレスコードと国内検閲によって被爆の実態は活字化されず、この間『ヒロシマ』が世界の言語に訳され流布しいち早く原爆言説のキャンオンとなったことは、今や動かぬ歴史的事実となっている。オバマの広島訪問の意義を説く二〇一六年五月二二日の朝日新聞の三浦俊章による社説さえも「原爆の惨禍を世界に広く知らせたのは、米国人ジャーナリスト、ジョン・ハーシー『ヒロシマ』である。（中略）『原爆の信じがたいほどの破壊力をほとんどだれも理解していない』という告知を添えて掲載した。原爆

は『真珠湾の報復』と信じていた米国民は衝撃を受け、原爆の使用を疑問視する声が広がり始めた」としている。しかし著者によると、従軍記者ハーシーによる、聖職者二名を含む生存者わずか六名についての間接的語りである『ヒロシマ』の現在に至る正典化を促したものは、「被爆者が検閲下にあった」状況(七〇―七二)と、『ヒロシマ』が西欧的伝統に則る思想と物語構造を持つ「アメリカ人によるアメリカ人のための原爆被災物語」(一一〇)であったからとしている。著者の『ヒロシマ』論の力点は、ハーシーのヒューマンイズムがいかにもトルーマン声明を補うキリスト教的救済的性格のものであったか、そしてアメリカの論理を踏襲した国内のベストセラー、永井隆『長崎の鐘』が描く「罪の報いと受難としての被爆」観と深く結び付いているかである。永井の、被爆は「神の摂理」(一九二)論が、いかにもトルーマン声明と同根で、その後の証言集も日本がアメリカの国是を内面化することへと繋がっていったかを著者は論じる。

その際正典を疑い歴史化するにあたって参照すべきものとして、三・一一以降の英語圏の核批評や、ロバート・リフトンの名著『ヒロシマを生き抜く』(*Death in Life: Survivors of Hiroshima* (New York: Random, 1968; 邦訳朝日出版、一九七二、増補再版、岩波書店、二〇〇九)等との比較は欠かせなかつたであろう。リフトンは原爆をホロコーストと捉え、あらゆる職業と年令の六〇名の被爆者との対話をもとに描き、ことにハーシーと違い放射能による原爆症に強い光をあてた。また最近の核批評は、著者も論じるデリダの論文「アポカリプスはまたない——全速力で前進、七発のミサイ

ル、七つの文書」<sup>(4)</sup>から距離をとり、ジェノサイドとしての側面を強調する<sup>(5)</sup>。

「ヒロシマ・ナガサキ」のカタカナ表記は、日本人にしかわからない地理的特質や戦争中の軍政や軍港も担ってきた両市の歴史を示す漢字表現に対し、いわば爆撃によって町のすべてを剥ぎ取られ、被爆の悲惨な事実のみを世界に訴えるときの、反核と平和のシンボル表記とされてきた。著者はこの表記の根拠をジョン・ハーシーの『ヒロシマ』にみて、永井隆の『長崎の鐘』とも深く結び付いて定着したとする。つまり「ヒロシマ・ナガサキ」の被爆神話は、被爆の実相を内側から描き始めた原民喜や大田洋子らの文学が志向する「表象不可能性」「極限的な出来事」(一〇〇)への接近とは真逆なものであった。本書が『ヒロシマ』と対照させてしばしば引用する二人の原爆作家の作品は、プレスコードに抑えつけられながらもやがて日の目をみていき、「世界文学の一翼を担うに足るもの」(一〇七)と認識されていくが、「占領下、日本の主権はアメリカにあった」のであり、GHQが最も恐れたものもまた、本格的な原爆文学による被爆の実相の活字による暴露と、メディアによる世界への流出であったと著者は指摘する。絶対主権をもったアメリカは、被爆地の実相に対抗して、国是を強化する結果となった『ヒロシマ』と原爆受難説の『長崎の鐘』など人道的キリスト教的被爆神話を擁護した。

ここで被爆神話への対抗軸として、少し時代が下るが、小田実の『HIROSHIMA』が詳しく考察されてもよかつたのではないかと思われる。小田もタイトルには腐心し、流布して神話的になつ

ていたヒロシマを避けたと考えられる。ストーリーの始まりをトリニティ・サイトのあるホワイトサンドに置き、アメリカで差別されていたネイティブアメリカン地区に住み、日本への爆撃機にのる米兵を主人公にした、まさに国境も人種も海も超えていく一大スペクタクルである。しかも小田が展開したベトナム戦争反対運動やその後の市民運動は、本書が論難する「閉ざされた言語空間」を打破しようとするものであった<sup>3)</sup>。

特に筆者が共感を持って読んだのは、著者が批判する日米それぞれの一国主義からくる「閉ざされた言語空間」が、実は『日本の原爆文学』一五巻や資料重視の『原爆文学史』作成においても、一国的な体系を目指す結果になっていて、この分野を近代日本文学の枠で集めているという論旨である(七四―七五)。ハーシーの『ヒロシマ』がどんなに問題があるとしても、またローレンスの『零の暁』(言及はされないが『地獄の爆弾』などの重要文献は、『原爆文学史』ではただ三行で書名のみと言及に終わっている。これらの作品はアメリカ史にもその影響は鮮やかに刻印されている。原爆文学を集める作業で、日本語以外の文献の慎重な扱いこそ原爆と被爆の真相に迫る道であろう。著者はこれらを「番外編」的に扱うと指摘するが、それは、本書の言う日米相互の無関心の構造ではあるまいか。そしてもう一点は、戦後の文化的ヘゲモニーは、好むと好まざるにかかわらず英語という世界語のヘゲモニーでもあったといえるが、日本語という圧倒的にローカルな言語の壁を、日本の文学研究者は乗り越えようとしているようには見えない。その結果、原爆文学研究が一国主義に陥りがちだという著

者の見解は否定できないであろう。翻訳大国として日本は言語文化の輸入におおいに努めてきたが、原爆文学の英訳はあっても少なく部分的受容にすぎないことを著者も指摘している。三・一一後、今や核汚染と核の危険が世界に拡大しており、「唯一の被爆国」もまた大いなる神話なので、絶えざる神話の解体と本書著者のような世界での議論の力と姿勢が要請されている。

## 注

- 1 Derrida, Jacques. "No Apocalypse, Not Now (full speed ahead, seven missiles, seven misses)." Trans. Catherine Porter and Philip Lewis. *Diacritics* 14.2 (1984): 20-31.
- 2 本書と関心を共有する最近の英語圏の核批評として以下がある。  
Mathews, John. *After Hiroshima: The United States, Race and Nuclear Weapons in Asia, 1945-1965*. Cambridge UP, 2010.  
Blouin, Michael and Morgan Shipley eds. *The Silence of Fallout: Nuclear Criticism in a Post-Cold War World*. Cambridge UP, 2013.
- 3 この点については伊藤詔子「核文学における Atomic Ghost——小田実『HIROSHIMA』」ロスアラモス、トリニティの文学」(*ALA Journal* 21, 2015:33-48)で論じたので参照されたい。

(二〇一五年七月二五日 作品社 二九七頁 二四〇〇円+税)